



東南アジア経済ミッション報告①

ミャンマー、ベトナム訪問記

環日本海経済交流センター長 藤野 文悟



環日本海経済交流センターでは、毎年一回富山県企業よりなるミッション団を中国へ派遣し、中国市場の定点観測を行ってきた。今年は中国習近平政権が大きなスポットを画する“一带一路”外交へ打って出たのを機に、関係の深いアセアン諸国であるミャンマーとベトナムを視察することとし、2月末にミッション団を派遣した。また、帰路シンガポールに立寄り、アセアン全体を展望することとした。5泊6日という日時の制約もあるため、ミャンマー・ヤンゴンとベトナム・ホーチミンでは日本企業等が造成している工業団地を中心に視察し、活力の一部を垣間見させていただいた。ここではその印象を散文的に綴ることとする。

ミャンマーにて

ミャンマーはこれからの国である。長年、国を引っ張ってきた軍事政権が民主政権と交替することになり、国家の発展はスー・チー氏のNLD民主政権に委ねられることになった。

ヤンゴンは緑豊かな古い日本の田舎の都市の様だ。英国風の洋館と古い東洋の建物が奇妙に混在している。長期に渉る軍事政権が行政機構を作り上げ、一部の財閥が95%の経済を牛耳る。インフラ（石油、ガス、電気）が不足し、道路は整備されていない。経済は中国、タイの影響を大きく受けている。日本の開発した工業団地は立派にできているが、周辺のインフラが未整備である。

更に積極的に外資を導入するには、新しいNLD政権がミャンマー国家の経営の方向を明確に示さねばならない。その為の人的資源は充分か。一挙の民主化は多分難しいのではないか。先ずその青写真を書くことが第一だ。

東南アジア経済ミッション日程

月 日	行 程
2/21(日)	成田⇒ヤンゴン
2/22(月)	ジェットロ・ヤンゴン事務所 ミャンマー日本商工会議所 ティラワ経済特別区 企業関係者との夕食懇談会
2/23(火)	ヤンゴンからホーチミンへ移動
2/24(水)	ジェットロ・ホーチミン事務所 アセダス・サービス・ベトナム ロンドウック・インベストメント ナガエ・ベトナム 企業関係者との夕食懇談会
2/25(木)	ホーチミンからシンガポールへ移動 ジェットロ・シンガポール 伊藤忠シンガポール会社
2/26(金)	シンガポールから帰国

現政権と妥協しながら二段階、三段階に分けて近代化を計ることが不可欠だろう。

その間、新しい人を養成しなければならない。中国は地政学的に枢要なミャンマーの開発に積極的に乗り出す。“一带一路”の要路で

もあるからだ。その中国とどの様に提携するかも新政権の課題だろう。

夜、かつてのアウンサン将軍の事務所と言われるレストランで食事をした。殆ど欧州人の客ばかりである。フランスパンとカレーがとても美味であった。夜の街は暗い。

勤勉な労働力と従順な民族性は次の段階への発展の可能性を予感させるに充分である。しかし、最後のフロンティアといわれるにはスー・チー氏の果すべき役割は重い。

ベトナムにて

ベトナムはある意味で出来上がった国である。(ミャンマーと異なる)したたかな共産党の国家経営の歴史が濃厚に反映されている。日本の工業団地は立派に整備されており、インフラも整っている。

外資法も一応出来上がっているが、解釈次第でどうにもできる曖昧な点が多く、官僚の不正のもとになるとも言われる。サイゴンの街は一方通行の道が多い。恐るべきバイクの波である。一人一台以上のバイクを持っているそうだ。そのバイクが一方通行の道を整然と波の様に一方向に流れて行く。自然の秩序なのか。ベトナムという国の秩序を現わしている様に感じられる。雑然としたミャンマーと全く異なるところだ。

シンガポールにて

アセアンを全体としてとらえる為にシンガポールに一泊した。シンガポールは人工的な街である。李光耀(リー・クアンユー)が一代で造り上げ、鄧小平も称賛した理想に近い都市国家だ。中華の儒教道徳が体現された都市国家と言ってよい。李光耀亡き後、それが

変化を遂げようとしている。外国人の富裕層が増加し、一人当たりのGDPはアジア一となっているが、貧富の格差が拡大し、シンガポール人の地位がどんどん低下している。そして、コストの高い国となった。国のあり方をどうするか、大きな曲がり角に来ている様に感じられる。

。昨年末、アセアン経済共同体が発足したが、アセアンには中核となるリーダーが不在で緩やかでありすぎる様だ。

本来リーダーであるべきインドネシア、タイ等のアセアンの大国が国内事情をかかえ、リーダーシップを発揮出来ないでいる。李光耀なき後のリーダーも見当らない。アセアンも大きな問題点を抱え転換点に立っていると見えようか。一つの黎明期に立っているのかもしれない。

そのなかで中国が進出し始めた。“一帯一路”“AIIB”がどの様に作用するか。ベトナム・フィリピンと中国との確執をどう解決するか。

アセアンの発展は世界に大きな影響を与える。日本も傍観している訳には行かない。一方で日・米・中の綱引きをやってはいけない。三国がアジアでどの様に協力するか真剣に考えねばならないとシンガポールで思った。当面“一帯一路”“AIIB”に日本がどの様に関与するか、日本外交の真価が問われるだろう。

以上